

要旨

日露戦争後に小学校教員向けに出版された単行本の教育小説 —国家主義・社会教育・良妻賢母主義—

ヴァン・ロメル・ピーテル

明治後期は初等教育が急速に拡大し、小学校教員が新たな文学読者層を形成した時代であった。「教育小説」と呼ばれていた教員向け小説が単行本と教育雑誌の掲載小説の形で数多く生産されたが、本論はいわゆる「冬の時代」、すなわち日露戦争後から大正期の始まりまでの時期を注目し、当時の教育小説が示した傾向の重要な一側面に光を当てる試みである。日露戦争後の日本の教育界は国家主義の強化、社会教育の発展、そして女性の社会的地位の問題への取り組みを主たる特徴としたと言える。本論は日露戦争後に当局が実行した保守的な教育政策を最も露骨に唱道した石川栄司の『理想の小学教師』（1906）、小泉又一の『教育小説 棄石』（1907）、蓮実珂川の『教育小説 村夫子』（1908）の3作を分析することによって、単行本の教育小説が具体的にどのような教育思想をどのように教員たちに対して伝達しようとしたかを究明し、明治末において教員向け文学が演じたプロパガンダ的とも言うべき役割についての理解を深める。

Abstract

‘Educational Novels’ Published for Japanese Teachers after the Russo-Japanese War: Nationalism, Social Education, and the ‘Good Wife, Wise Mother’ Ideal

Pieter VAN LOMMEL

The latter half of the Meiji period was the time in Japan in which elementary education expanded rapidly and elementary school teachers formed a new literary readership. Stories specifically aimed at teachers, at that time often labeled ‘educational novels,’ were published as stand-alone books or appeared as short stories in educational magazines. This paper zooms in on the so-called ‘winter period,’ the short decade between the end of the Russo-Japanese War and the start of the Taisho period, to shed light on one important tendency of educational novels in this period. Education in Japan after the Russo-Japanese War can be characterized by a hardening nationalism, the development of social education and heightening discussions related to the social position of women. The stand-alone novels for teachers, namely Ishikawa Eiji’s *Risō no shōgaku kyōshi* (The Ideal Elementary School Teacher, 1906), Koizumi Mataichi’s *Kyōiku shōsetsu: Suteishi* (Educational Novel: Foundational Rock, 1907) and Hasumi Kasen’s *Kyōiku shōsetsu: Sonpūshi* (Educational Novel: Country Teacher, 1908) form the subject of analysis. By examining these novels, which espoused the government’s conservative education policy most explicitly, this paper wants to clarify how the stand-alone educational novels tried to transmit precisely what kind of educational views to the teachers, and thus deepen our understanding of the propagandistic role that literature for teachers fulfilled at the end of the Meiji era.

日露戦争後に小学校教員向けに出版された 単行本の教育小説

—国家主義・社会教育・良妻賢母主義—

ヴァン・ロメル・ピーテル

1. はじめに

初等教育が急激に拡大した明治後期において、小学校教員が新たな文学読者層として登場した。これにともなって、教員群を読者の対象とした単行本や教育雑誌の短編小説がこの時期に数多く現れた。以前の拙文では、経済的に恵まれなくとも中間知識人層を形成した地方の小学校教員が送った生活の実態とその中で文学が占めた位置の重要性を明らかにした¹。また、日露戦争前に雑誌『教育界』（1901-1923）に掲載された短編小説群を分析することで、心を慰めたり、教員生活の意義を探ったり、近代教育と近代社会を批判的に検討したりする文学が果たした多様な役割を究明した²。日露戦争後にも多種多様の文学作品が様々な教育雑誌に掲載され続けたが、文部省がこの時期に強化した国家主義的な教育政策は「教育小説」、すなわち教員向けに出版された小説の内容と形式に大きな影響を与えたと考えられる。本論では、日露戦争後の教育小説についての理解を深める段階の一つとして、公式イデオロギーを最も露骨に唱道した石川栄司の『理想の小学教師』（育成会、1906年）、小泉又一の『教育小説 棄石』（同文館、1907年）、蓮実珂川の『教育小説 村夫子』（育成会、1908年）の3作の単行本を分析し、明治末期の教育小説に見られる新たな傾向を明らかにしたい。

『理想の小学教師』、『棄石』、『村夫子』はいずれも教育出版物を専門とした出版社（育成会、同文館）から発行され、当時の教育雑誌で頻繁に宣伝され、批評され、そして版を重ねて出版されたため、実際に多くの教員たちによって読まれていたと思われる教育小説である（広告の具体例は、図 1-3 を参照）。執筆者のうち蓮実珂川については詳細が不明であるが、石川栄司（1865-?）は師範学校卒業後小学校教員となり、後に主に出版活動を通して広く教育の発展に尽くすことを目的とした育成会という組織を創立し、この育成会から発行された雑誌『教育実験界』（1898-1923）も創刊した人物である。小泉又一（1865-1916）は当時東京高等師範学校の教

授であり、後に文部省視学官となった。つまり、石川と小泉は2人とも教育界において地位の高い教育家として、文学という媒体を利用し、小学校教員の指導を試みたと言えるだろう。上記の3作は内容としては、地方に留まり、国民教育と国家に献身する理想的教員像を読者に提示した教育的なものであったということは先行研究で指摘されているが³、本論はこうした指摘を踏まえ、これらの作品が具体的にどのような教育思想を唱道したか、あるいは日露戦争後の教育政策とどう絡み合っていたかという問いに答えることによって、この3作を当局が日露戦争後に実行した教育方針のプロパガンダとも呼ぶべき作品としてより正確に位置付ける試みである。日露戦争後に公式教育思想がどのように教員たちに対して唱道されたかを文学の観点から究明することで、その公式教育思想を具体的に理解することができ、さらにこの時期に教員向け文学が演じた社会教育的な役割の重要な一側面も明らかになる。

以下では、まず日露戦争後の教育史的背景を描いたうえで、国家主義、社会教育、良妻賢母主義の3つの主要点に注目し、教育小説の位置づけを行いたい。

よを配附御旨る依に 界 験 實 育 教 は方の文件御り依に生界世

育 教
界 醒
の 見
見 よ
見 よ
の 世
小 學 教 師
其 感 化 の 多 大
せ ば 學 ば べ
此 世 に せ ざる べ し

(高尚優美和木上製) 定價金五拾錢 郵税金六錢

理想の小学教師

巨熊居士 蟹穴
如何なる人
時勢の機運は、先聲を起し
教育界の醒め
大快腕を揮ひし、嗚呼理想の
小學校教師の生涯を叙して、幼兒に始まる、其間に及ぶ、
活動的研究、校長としての主義、獨身の
校校騒動、修養、學生
高尙純潔、小學校
校校騒動、修養、學生
獨身の

高 評 三 版
部 業 營 會 成 育
館 文 寶 市 阪 大 備 賣 關 棚 柳 西

図 1：小説『理想の小学教師』（第3版）の広告は「教育界の醒え！！見よ見よ」と読者の注目を引き、小学校教師の生涯、学校騒動、修養、学生としてと教師としての活動及び研究、校長としての主義、独身の経歴、家庭の和楽、子女の教育、育英の効果、人生の意義、恋愛の神秘などを語りながら、小学校教師向けに理想的な教師の全体像を提供する作品であると派手な宣伝を行っている。『教育実験界』18巻9号（1906年11月10日）、前付の9頁。

此廣告を見御注文の方の教育學術界廣告の依に御附記を乞ふ

東京高等師範學校教授 小泉又一先生著

東京美術學校教授
小林萬吾畫

(石版十數度刷艶
麗なる口繪附き)

教育小説 棄石

上製美裝全一冊
定價七十錢
(郵稅金八錢
菊判約二百七十頁)

好評三版發賣

こゝに師範學舎の窓の下、悶々の思ひに沈める好青年が、たゞ神聖なる育英の任を自覺するや、肅然として前途の公明を翹望し、あらゆる安想を排除し來りたる、これ實に本書の發端にして彼れが小學校教師たるの任を拜命するや、多年懐抱せる理想を顯現すること多年、その間教授の法、訓練のや々たるかを示さんとすもの、既に彼れが誠と愛と勇とを以て、訓練の間に且つ圓滿に幾多の學童を薰陶すること多年、その間教授の法、訓練のやがて、本書の骨子ともいへば、平生の流麗妙なる筆によりて、小説的上新らしき學術を研議すること、亦本書が流麗妙なる筆によりて、小説的上の困苦と理想のみならず、教育者の理想と慰安とを示すこと、小説的描き出されたるのみならず、教育者の理想と慰安とを示すこと、小説的切を極むとされる、たゞ本書を編かんか怒りに至るべきなり、教育者の任にあるものは斯界の先導者たらんことを願ふに速かに本書を熟讀して自己の適從する所を悟らざるべからず

教育界空前の教育小説!!!
出版界無前の大好評!!!

健全なる人生の行路を示すなり
教育家の慰安はこゝにあり



図 2：教育小説『棄石』（第3版）の広告。「東京高等師範學校教授 小泉又一先生著」この本は「教育家の慰安はこゝにあり 健全なる人生の行路を示すなり」と、その教育的・道徳的な内容が強調され、小學校教員向けに宣伝されていた。『教育學術界』15巻5号（1907年8月）、丁の5頁。

夏 之 讀 物

ベスタロッヂ原著 文學士 久保天隨君補譯

教育小説 醉人の妻

全一册
菊版優美製木
定價金五拾錢
郵税金八錢

好評 拾七版
本書は惡徳奸謀なる一刑恵を、可憐なる醉人の妻との糾紛錯綜せる大悲劇が、温良玉の如き女主人公の慘愴たる苦心によりて終に花咲き鳥歌ふ理想の樂天地に到着する面白き光明小説讀め教育家は勿論學生も學者も、宗敎家も、文士も、實業家も

蓮實珂川君著 好評嘖々 全一册

教育小説 村夫子

總クローリス
菊版優美上製
定價金七十錢
郵税金八錢

▲讀めく教育上由々しき此の極端なる寫真小説を繙讀先づ驚くべきは教育社界に於ける大腐敗の寫實なり、再思すれば壓情が偽善の病根なるを悟り三思すれば教育者も亦人間なるを悟るべし、不品行果してそれが不品行なるか男女相愛する何の不可かこれあらん、濫愛によりて其の一方が悲慘の生涯を送らざるを得ず、此の不品行漢こそ理想の教師と呼ばはるゝものなり。
▲讀めく開關以來實に未曾有の此の教育小説を

發兌 東京本郷區森町一 育成會 全名圖書 到國名 處肆

図 3:「教育小説」と銘打った『村夫子』は「写実小説」として宣伝された。右側の『教育小説 醉人の妻』は久保天隨が 1901・明治 34 年に和訳し、すでに 17 版を重ねたベスタロッヂの『リーナハルトとゲルトルート』(1781-1787) である。『教育實験界』26 卷 2 号 (1910 年 7 月 20 日)、巻頭、頁番号なし。

2. 日露戦争後の教育史的背景

日露戦争未から大正時代の始まりまでの時代は一般に「冬の時代」と呼ばれている。政府が激化してきた社会問題とそれにとまなう社会的危機に 대응する形で、忠君愛国のイデオロギーを確立し、それを学校教育及び社会教育を通して明治社会、とりわけ地方の青年たちに浸透させようとした時期であった。日露戦争後に発生した暴動の一例としては、1905・明治38年に東京の日比谷公園を始めとして、各地で開かれた日露講和条約（ポーツマス条約）に対する反対集会を挙げることができるが、講和条約反対だけではなく、日本の近代化と資本主義の普及が生み出した社会問題も暴動の原因となった。1907・明治40年に起こった足尾銅山の暴動や、明治40年代を通して多発した坑夫や労働者のストライキは産業化にとまなって形成された下層階級の労働環境と経済問題を暴き、広く痛感されていた不平を表わした⁴。また、とりわけ地方においては、不景気の連続と税負担の増加（地方税と国税は合わせて1897・明治30年から1912・明治45年の間に3倍になった）⁵のために、多くの自作農が土地を売らなければならなかった。全耕地面積では、小作農は1868・明治元年と1908・明治41年の間に27%から45%まで増加した⁶。教育と就職、経済的かつ社会的な昇進を目的として、地方を去り都会へ移動する青年たちの都会への志向もメディアにおいて注目されるようになった⁷。思想的には、社会主義や個人主義、虚無主義、無政府主義、自然主義、自由恋愛などがメディアや文学を通して社会に浸透し、政府と保守的思想家や評論家、新聞記者、教育家などによって道徳的かつ政治的に「危険な思想」として捉えられ、厳しい批判的となった⁸。これらの社会問題と思想的な傾向はすでに明治30年代から発生したものであるが、当局が検閲や抑制を強めながら、健全とされる思想、ことに天皇イデオロギーの普及を政策の中心としたのは日露戦争後の時期であった。

教育政策における転換を顕著に表すのはまず1906・明治39年に文部大臣の牧野伸顕（1861-1949、任期1906-1908）が公布した「学生生徒ノ風紀振肅ニ関スル件」という訓令である。牧野は「近時発刊ノ文書図画」で見られる「危激ノ言論」、「厭世ノ思想」、「陋劣ノ情態」を「有害」な現象として指摘し、青年女子を「危険ノ思想」の悪影響から守るために、学生たちの読書傾向を管理するよう、中等教員と校長へ呼びかけた⁹。この訓令は社会主義や自然主義、恋愛小説の取り締まりを目的としていた。また、1908・明治41年に発布された戊辰詔書は社会問題と危険な思想に対処すべく「勤儉」の徳を唱道し、忠実に仕事に励み、国家のさらなる発展に献身する「忠良ナル臣民」という模範を提示した¹⁰。1910・明治43年の第2期国定教科書も、思想や信仰の自由、公衆衛生や生活ルール、勤勉、立身出世、社会の

進歩といった近代市民社会の徳目に重点を置いた第1期の修身国定教科書（1903・明治36年、翌年採用）に対して、立身出世に関する内容を減らし、重点を個人と近代社会から家族と国家へ移し、忠君愛国主義を初等教育の中心とした¹¹。師範学校規定の改正や修身教育に関する研修会の開催、師範教育を受けなかった代用教員と准教員に対する管理の強化などは、小学校教員を国家の担い手として動員するために政府が実行した対策として挙げられることもできる¹²。なお、教員は指導者として学校でだけでなく、たとえば青年会や同窓会などにおいても、義務教育年齢を超えた青年たちや親に対して教育勸語や戊申詔書の意味や祖先崇拜の重要性を説くように期待されていた¹³。忠君愛国主義と社会教育の発展はこのように明治40年代の教育政策の特徴を成した。

最後に、明治40年代に女性教員が小学校教員群の重要な一部を形成するようになったことも指摘しておく。女性教員数は日露戦争前後に急増し、明治40年代から小学校教員総数の25%以上を占めた。従来男性によって支配されてきた教育界に登場する女性は良妻賢母主義の立場を取った教員から厳しい批判を受けていたが、経済的困難と教員不足の問題に直面した市町村にとっては、男性より給料の低い女性教員を採用することが一つの解決策であった。なお、教員として教育と国家に貢献できる女性の価値を擁護したり、性差別を批判したりする声も明治40年代に上がり、近代社会における女性の社会的地位と役割に関する活発な議論を起こした。

忠君愛国主義という公式イデオロギーの確立、社会教育の発展、女性の社会的地位に関する問題は上で確認したように、日露戦争後の教育界の特徴を成す要素であり、以下で分析する教育小説においても主たる内容を形成した。

3. 教育小説のパターンと理想的教員像

『理想の小学教師』、『棄石』、『村夫子』という単行本の教育小説は地方に留まる理想的な教員像を描くことで、青年教師・読者たちの立身出世や上京、進学願望を制し、地方生活と教職の価値を説く小説群であった。これらの小説を構成するパターンは和田敦彦によって適切に表現されている。

（教育小説は、引用者）都会での栄達を一方におき、その一方に地方の小学校勤めにおいて、両者のせめぎあいのもとに主人公を置く。そして多くの場合には、より高い地位や中央での栄達の機会がやってくるのだが、あえてその地方の小学教員を選び取り、最終的には家庭を持って校長となる、あるいは碑が

残る、ということを経験的な結末として準備する¹⁴。

主人公は社会的地位の比較的高い家に生まれ、進学や出世を志す地方青年だが、親の死亡や家の没落にともなう経済的な問題で志を遂げることができない。たとえば、小西誠一（『棄石』）は士族の家に生まれるが、家が没落し、父親も死ぬため、中学校を中退し代用教員として教鞭を執らざるを得ない。鈴木安雄（『村夫子』）は村落の「第一等の名家」の長男だが、母親に死なれ、家も没落してしまううえに、恋愛スキャンダルが原因で師範学校から退学させられ、他の村の代用教員となる¹⁵。小説はこのように主人公を単なる地方青年ではなく、むしろ明治維新以降の敗者として意図的に位置づけ、不満を抱きながら生きる彼らに対して地方教員という新たな役割と生きがい提示する。主人公はそれぞれの経緯で文部省の検定試験（『村夫子』）を受けたり、あるいは師範学校（『棄石』）を卒業して、教職の価値を認識し、地方教育に全力を尽くす模範的な正教員に、そして後に校長となる。教師たちは中学校や師範学校附属小学校、実業界へ移る機会も与えられるが、理想的な教員か校長として地方に留まる。『理想の小学教師』のみは円満なる環境で育つ主人公を登場させるが、執筆者石川栄司が後書きで説明するように、「目下の教員の多くが兵役忌避のために、若くは学資の不十分なるがために師範に入学せるものにして、従つて教師としての資格に欠くところある」からである¹⁶。石川はそうした消極的な理由で教師にならざるを得ない者ではなく、最初から積極的に教職に尽くす若者を理想の教員と見なし小説で描いたが、この教員も中学校の教員免許を取得するにもかかわらず、昇進でなく、故郷での小学校教員の生活を選ぶことから、他の単行本の主人公と同類である。

小説は教職の価値を説くためにいくつかの戦略を用いている。たとえば、地方と児童を美化する箇所はいくつか見られる。『棄石』は地方を「幸福ある田園の空気」として美化し、教師が児童とともに自然の中を散歩し、児童の好奇心と元気さに触発されて自然科学について教えるという牧歌的な場面を描く¹⁷。また、児童は「可憐の小天使」¹⁸あるいは「罪なき」¹⁹存在と美化され、教師の心の慰めとなる。しかし、日露戦争後の単行本の教育小説はロマン主義文学や抒情文とは異なり、美文をもって地方生活を美化するよりも、読者たちに対してははっきりと教訓を唱えることが特徴である。たとえば、教師が素朴な生活を送りながら老母や老父の世話を尽くして親孝行をし、神聖なる教育に献身的に奉仕するという価値が唱道される。教師たちは酒も飲まず、たばこも吸わず、娯楽として春花秋月や尺八、読書、運動、教育の研究という「高尚なる趣味」をもっている²⁰。教育小説は経済的な困難に直面した教師たちの実態を完全に無視できなかったため、直接に物質主義を批判し、儉

約と精神界の価値を唱えた。「要するに、十分節儉に注意して、成丈け、物質の欲望のために制せられぬやうにして、精神界に自由に遊ばなければならんぢやないか……教育は元来精神的の事業だからな……」と、俸給 22 円で一家 5 人を支える『棄石』の主人公が小説の教訓をまとめている²¹。地方で質素かつ平和な家族生活を送り、放課後も無邪気な児童を相手にし教育と村の発展に全力を尽くすという理想的な教師たちは村全体、妻や児童、保護者の尊敬を得る。教師のために報徳会（『理想の小学教師』）が開かれたり、頌徳碑（『村夫子』）が建てられたりする。教師の努力のおかげで村の風習と経済も著しい発展を見せる。「献身的に村夫子となつて、此学校に尽し給へ、其感化功績は到底一中等教員の及ぶ所に非ず」と『村夫子』の校長が説く²²。日露戦争後の単行本の教育小説は教職を美化し、親孝行や質素、節儉、精神、献身の価値を唱道し、教育の効果を理想化することで、立身出世を夢見ながら行き詰まりに直面した地方青年に対して地方教育を新たな理想と任務として提示していたのである。

4. 日露戦争後の教育政策と教育小説との関係

経済的かつ社会的に上昇するという夢から覚め、地方教育の真の価値を見つけていくパターンと理想的教員の描写は日露戦争後の教員向けの単行本と教育雑誌に掲載された多くの短編の特徴であるが、とりわけ単行本が力強く唱道した立身出世の否定と地方生活の理想化には、その時期に定着していく国家主義と天皇制イデオロギーという歴史的な背景がある。以下では国家主義、社会教育、良妻賢母主義というテーマに注目し、単行本の教育小説が教員たちをどのように明治政府の政策へ傾倒させようとしたかを具体的に示す。

4.1. 新たな国家主義の形成

日露戦争後に出版された教員向けの単行本の教育小説、すなわち『理想の小学教師』、『棄石』、『村夫子』は何よりも個人主義を否定し、共同体と国家の重要性を説いた。明治初期と中期を通じて一般に唱道された各個人の成功と富という理想は、素朴な地方生活だけではなく、新たな国家主義によっても置き換えられた。

たとえば、軍隊における教育が「人権を軽んずといひ、人格を無視す」という批判に対しては、「軍隊は国民一般の人権を重んじ、人格を貴ふ所似なり、全体のために部分が犠牲とせらるゝことは当然のことのみ、豈ひとり軍隊のみを例外とするの要あらんや」と『理想の小学教師』の主人公が反論している²³。軍隊を国家存立の基調の一つと見なすことは明治初期から政府の理念であった富国強兵の共通点で

あるが、「全体のために部分が犠牲とせらるゝことは当然のことのみ」という主張は個人と国家との関係を捉え直した価値観を示唆している。実は、明治中期に「教育小説」として児童や親向けに出版され、立身出世主義や文明開化の理想、女性教育の重要性などを唱道した作品群では、登場人物が軍隊に入り国家の防衛と発展に尽力すると同時に、戦争の英雄や武官として成功を遂げるので、軍隊教育は国家のためでありながら、個人的な立身出世の方法でもあった²⁴。これに対して日露戦争後の教員向けの教育小説は立身出世の物語を排除することで、明治期の理念的な基盤の重要な一部をなした自由主義と個人主義の概念自体も否定した。

日露戦争後に単行本の教育小説は立身出世と自己実現とは正反対の人生観と社会観を提示した。『棄石』の語り手はそれを以下の引用で具体的に説明する。

凡そ人たるもの、世に生るゝや、各々使令を帯びて来る。然れども其の命の何たるや、容易に知察すべからざるなる。此の故に世と闘ふもの必ずしも成功を期すべからず。傑才を有し、大望を抱くも、天は彼をして望を達せしめず。徒らに轆轤不遇に泣かして極力尽瘁。唯辛勞の間に斃死せしむ。遮莫。天、無情なるにあらず。其の人天の使令を果さざればなり。

使令は、やがて天職なり。天職を知る者賢にして、能く之を濟す者勇なり²⁵。

語り手が説くように、各個人が才能や忍耐に応じて自分の夢を実現させるのではなく、生まれた時から特定の「使令」を与えられ、その与えられた任務を果たさなければならぬ。その任務が地方教員であることは言うまでもない。『棄石』は「天は自ら助くるものを助く」とスマイルズの『自助論』も引用するが、「天、無情なるにあらず。其の人天の使令を果さざればなり」という教訓はスマイルズの見方と正反対である²⁶。自分に与えられた社会的な役割を知り、その任務に尽くさなければならぬ。人々、すなわち教師たちは「青春の空想を抑へて、身は一介の村夫子となり、以て終生を育英のために」捧げなければならぬとされている²⁷。

教育小説は上記のように個人の自由に対する制限を設け、代わりに「全体」、すなわち家と社会と国家に重きを置く。初等教育はそもそも「国民教育」²⁸と呼ばれ、児童も自己実現を達成するものではなく、「健康なる後継者」²⁹や「第二の国民」³⁰、「次代の国民」³¹、すなわち家と国家の一員として位置づけられている。『棄石』では師範学校の校長が新卒業生に次のように説いている。「諸君の任は小学校だ。所謂国民教育だ...次代の国民たる幼稚なる児童に国民的思想を鼓吹して、正しき帝国の道徳を培養ふのだから...ま、早く言へば国体の尊厳や、国家の隆運の基礎は実は、

諸君の掌の中に在るといつても可い……」³²。教育の内容も技能の習得（仮名の読み書き）や知識の伝達（歴史的な人物や出来事）だけでなく「品性陶冶」、すなわち国家主義の教授から構成されていることは『理想の小学教師』に明記されている³³。たとえば、「われいかで大に仮名教授に力を尽し、一面には国粹を保存し、一面には仮名の活用を知らしめん」と主人公が述べている³⁴。「歴史教授に於ても亦事実を知らしむるのみならず、以て忠君愛国の心を養ひ、以て祖先崇拜の念を高め、以て協同一致の風を作らんとせり」³⁵。このように国語や歴史の教科を通して内面化する忠君愛国主義は小説『棄石』の場合、学校で行われる新年拝賀式の細かい描写からも読み取れる³⁶。また、教師が浸水した校舎から「御聖影」を救う場面で最も露骨に表現される。『棄石』の主人公はアクション映画の英雄のごとく、「家を忘れ、母を忘れ、又身を忘れ、夜中に河川堤防の決壊によって浸水し、倒壊しそうになった学校に御真影をわざわざ救いに行く³⁷。要するに、富や名誉だけではなく、個人主義と自由主義の理念自体も否定し、国体や忠君愛国、国粹保存、祖先崇拜、天皇崇拜を思想の中心に置くこれらの小説は、日露戦争後に定着する新たな国家主義を唱道したのである。

忠君愛国主義を説く日露戦争後の単行本の教育小説がみな文語体で執筆されたという指摘も加えることができる。言文一致体が近代文学の文体として一般に普及したにもかかわらず、国家と関連し重みのある内容はあえてやや堅苦しい文語体で表現されていた。たとえば『棄石』は四字熟語や漢文調を頻繁に利用し、古典への言及もテキストに挿入している。上記の引用では「轆軻不遇」は中国の歴史書『北史』を出典とする熟語であるし、小説の結末では儒教に言及することで教訓をいっそう謹厳に確認している。すなわち、主人公の教えは「富貴淫する能はず。貧賤移す能はず。威武屈する能はず」³⁸という孟子の言葉で表現され、「聖人の教理」³⁹として提示されているのである。『棄石』と『理想の小学教師』の執筆者は、二人とも地位の高い教育家であり、荘重な響きのある文語体や古典への言及をもって自らの権威を誇示し、小説の教訓を力強く読者たちに教えようとした。また、最も熱烈な国家主義を説く『棄石』が最も堅苦しい文語体で執筆されたことはこの観点から見れば偶然ではない。

4.2. 社会教育の促進

日露戦争後の単行本の教育小説は地方教育に全力を尽くし国家に奉じる理想的な教員を描いたが、注目すべきなのは教師が学校教育だけではなく、より広く村人の家庭教育や児童の放課後の指導、村全体にも積極的に取り組むことである。たとえば、『棄石』では洪水によって100人が死亡、校舎も倒壊するが、寒村の教師たち

は災害の後、低い月給をさらに2割返上することに同意し、その分を村の復興に寄付する。また、主人公は災害で親を失った孤児を養子にするうえに、村の窮状の中、たえざる努力をもって人の模範となり、学校と村全体を指導し、同僚と児童、村人に強い感化を与える。『理想の小学教師』の主人公は幼稚園や補習学校、盲啞学校、図書館、運動場、農談会を設立し、『村夫子』の主人公は青年団や娘の会、母の会、戸主の会を組織し、納税組合も発展させる。村全体に焦点を当てることは教師たちの慈善を表すだけでなく、明治末期に盛んになる地方改良運動と社会教育という政治的かつ教育史的な背景も表している。地方改良運動は地方における経済的かつ精神的な危機に応える形で、地方の経済的な基盤及び人々の精神的な統制を強化することを目的とし、日露戦争後から中央政府が実行した政策であった。この中では、教育の役割が夜学校や青年団、同窓会、農村会、図書館などを利用しながら、農業や産業についての最新の知識を広めることと、公的イデオロギーを浸透させることであった⁴⁰。

『村夫子』の主人公の鈴木先生は様々な会を組織するが、とりわけ彼が創立した青年団の感化が著しい。村長は主人公の教師を以下のように褒める。

鈴木先生の御尽力で青年団も出来、若い士の風儀も全然大きく生まれ替ったのです。先生のお作りになつたといふ国歌……「団旗堂々翻し、理想の郷を築かんか」と言ふのだから、国歌に対しても悪い事は出来ないつて、意気込んでいますからね⁴¹。

青年団は青年の風俗を改め、理想の故郷を構築するために機能する。また、団体の旗は「日の丸の旗に横に三本の筋を青く染め貫いたので、之れが日本の川西（故郷の川西町、引用者）にして見たい」という意味だが、地方・故郷と国家を象徴的に結びつける⁴²。団旗を持って駅で入営する兵士たちの見送りをすることも青年団の役割である⁴³。『理想の小学教員』の主人公は村農会を組織し、講習会を催すことで「農業に関する新たなる知識と希望とを」を与える⁴⁴。一方では、彼が設立する補習学校は「笈を負うて中学に入ると或は父母の監督なきために自ら墮落し或は学費の継かざるために中途退学し、また遊学の志は勃々たるも資に窮して空しく呻吟し緘とるも働き得ず書を開くも学び得ざる多くの青年」、すなわち共同体や国家に尽くさない、危険な思想を発展する恐れのある不満な青年群を対象とし、教育を与えた⁴⁵。また、盲啞学校の創立も単に盲啞者たちのためだけではなく、社会全体の利益のためである。主人公の教師は以下のように説明する。

盲啞をその儘捨て置いたならば、彼等は衣食にも差支へます、また仮令富豪の家に生れて衣食には事欠かぬものでも、天賦の知識才能を發展することができません、いづれにしても不幸の極であります。たゞ盲啞自身のために不幸なるのみならず、社会の上から見ても不幸であります、非常な厄介者であります、食うて着て寝て起きているばかりの盲啞は社会の害虫同様であります⁴⁶。

盲啞教育は盲啞者の福祉を目的とすると同時に「広く社会の富」を作り「衆人の利益」も図るものでもあった⁴⁷。教師たちが促進した社会教育は新しい科学的な知識と技術を普及させながら、国民を統制し社会の安定を確保する役割も果たしていた。学校と教師たちは「徳風」と「地方教化の中心」として、勤儉や共同、献身、忠実の徳目を促し、貧困村の復興を実現させた⁴⁸。『棄石』と『理想の小学教師』、『村夫子』は、このように、政府が当時発展させた社会教育の政策を具体的な形で読者たちに提示し、教師に果たさなければならぬ任務を与えたと言ってよい。

4.3. 良妻賢母主義の唱道

日露戦争後に行われた国家主義と地方生活の強化は女性の役割の再確認にも至った。女性は法律上政治から排除され、明治民法によって社会と家庭内における劣位が規定されたが、明治後期には女子教育が盛んになり、高等女学校数は26校（1897・明治30年）から100校（1905・明治38年）、209校（1912・明治45年）まで急増した⁴⁹。立身出世や上京を望む女性、外国語や高度で近代的な知識（「学問」）を身に付け、読者や投稿者として積極的に出版文化に参加する女性、また就職する女性の発生は、明治社会における様々な制約にもかかわらず顕著であった。たとえば小学校の女性教員数は11%（明治30年）から20%（1905・明治38年）、27.5%（1912・明治45年）まで増加し、地方においても女性教員の存在が珍しくなくなった⁵⁰。明治30年代と特に明治40年代に女子教育の是非とそのありようにまつわる論争がメディアで広がり、当時の教育家がまとめたように、男女同権論や自由結婚論、恋愛神聖論、女子の独立自営や良妻賢母に関する論も説かれた⁵¹。教養のある女性群が拡大していくことに連れて、社会における女性の地位がますます問題視されるようになった。

単行本の教育小説は社会的な安定を図る中で、自由恋愛を批判し、見合い結婚を奨励した。そして教養のある女性が社会で活躍するという理想を否定し、代わりに良妻賢母の理念を用いて家事や子育てに専念する従順な女性を理想として提示した。

『村夫子』は恋愛の問題を小説の主たるテーマの一つとする。そのあらすじを簡

単に紹介しておく。若い時に母に死なれた栃木県黒羽向町余瀬出身の主人公鈴木安雄（19歳）は宇都宮の師範学校に入学する前に、地元のお合（17歳）という女性に密かに愛を告白し、卒業後結婚するという約束を結ぶ。だが、お合は継母によって虐待され、ともかく早く他の男性との結婚を強制されるため、家出し平林に住む叔父と叔母のもとへ逃げる。平林では愛情深い家庭にて歓迎されたがそれゆえに、叔父の息子との結婚を頼まれたら拒否できない。お合はこの事情を手紙で説明し師範学校在学中の安雄に送り、夏休みに安雄にも伝えと、その恋愛事件が暴露され新聞で報道され、安雄は放校される。安雄は足利郡北郷尋常高等小学校で代用教員として教鞭を執り、検定試験を受けることで本科正教員の免許を取得したうえで、郷里の小学校へ転勤し首座教員（教頭）となり、成功を遂げる。また、帰省する前に親友の妹と恋に落ち結婚の約束をするが、母が死ぬ前に安雄の結婚相手をすでに決めたということを知ると、約束を破り、母の臨終の願いに従って地元のお菊と結婚する。あわれなお合は安雄が結婚する日に安雄の写真を見ながら病死するが、安雄は健全な家庭をもって、教師として村の改良を果たしていく。

あらすじですすでに明らかのように、『村夫子』は恋愛を墮落と結び付け批判するうえに、恋愛結婚と見合い結婚も対立させ、見合い結婚を唱道する。恋愛ないし「情」が及ぼす危険は小説を通して繰り返し説かれている⁵²。安雄の父は、女性と関係をつき資産を全部失った青年の話をし、「宜いかい安！！なんでも失敗るのは酒と女だ、古人も酒と女に心許すなつて戒めてあるわい」と師範学校に入学する安雄に警告する⁵³。「女は危険だね君！！」と師範学校の友人も戒めるが、安雄は恋愛問題に巻き込まれ放校される⁵⁴。その他の青年たちも小説に登場するが、女性との関係を結ぶ者はそれぞれ失敗ないし墮落してしまう。継母に虐待されるあわれなお合の薄幸や、師範学校のあまりにも厳しい処分に対する同級生からの批判的な発言は逆にお合と安雄の間に芽生える純粋な愛への同情も引き起こすと思われる。しかし、お合が化け物として安雄を生き埋めにしようとするという安雄の悪夢の描写と、自分の罪を認めるお合の病死に対して健全な家庭を持つ安雄を置く小説の結末は、恋愛と女性に対する否定的な価値判断を明確に提示する。見合い結婚は『棄石』と『理想の小学教師』との共通点でもあり、明治末期に定着した婚姻慣行となったが⁵⁵、『村夫子』は意図的に恋愛結婚と見合い結婚を対立させ見合い結婚を選び取ることで、主人公が持つ親孝行と義理の徳目の重要性を主張するうえに、当時の若者の間に流行した自由結婚・恋愛結婚・恋愛神聖という概念に対して明確な反論を示し、最も保守的な立場を代表する。

安雄が最終的に結婚相手とするお菊は、教養のある美しいハイカラな芳枝（友人の妹）と比較すると「品がない知恵の光も輝て」ないが、「お菊に勝つた点を強て

求めて見れば（中略）頭髮のやゝ多いのと、田舎育ちの無垢であるとの二つである」⁵⁶。教養や品に対して地方の素朴さと無垢さを優れた特徴として提示することは地方の優越を確認するだけではなく、良妻賢母の理想にもつながる。お菊は素直で従順な女性として描かれるが、『棄石』と『理想の小学教師』の主人公たちの妻も「生来温順にしてよく、父母に仕へ」⁵⁷、「品格よき微笑を漏ら」⁵⁸す女性として、「慈母賢妻内助に巧に能く家事を理めて彼（主人公の教師、引用者）をして豪も後顧の憂あらざらしむ」⁵⁹と描かれている。「ス井ートホーム」における男女の役割は『理想の小学教師』が明確に説明している⁶⁰。

彼は毎日学校に通勤し、一層の熱心を以て教育に従ひ、成績日々にあがり、信用月々に加はれり。彼女は家にありてはよく内を守り、或は彼が研究の結果を摘録せるものを浄写し、或は裁縫し洗濯し、或は料理し洒掃せり⁶¹。

また、こうした良妻賢母主義の枠からはみ出す女性は、女性教員を含め、批判的とされた。『棄石』では小学校の女性教員が「わが社会の風上」に置けない、着物や髪形などばかりに気を入れ、教職よりも「身を飾るのが商売」だと主人公によって軽蔑される⁶²。

良妻賢母主義は女子教育を完全に否定はしなかったが、その条件と内容を制限した。たとえば『理想の小学教師』の主人公の妻は小学校卒業後、上京し女学校に入り、「厳格なる叔父の許に寄寓」⁶³した。また、小説は女学校の教育方針についても以下のように、はっきりと主婦と母に限る女性の役割を説いている。

当今の婦女子しきりに女権の拡張を唱へ良妻賢母主義を以て因循とし卑屈とす、誤れるの甚しきものなり、女子は男子の玩弄物にあらざると共に、また独立して自営すべきものにあらざり、必ず男子と相俟ちて完全なる家庭をつくり、家政を整理し、子女を教育し、夫をして後顧の憂なからしめ、健全なる後継者を養ふを以て、自己の天職とすべきものなり⁶⁴。

『理想の小学教師』は日露戦争後の女子教育論争を背景として、女子が男子の「玩弄物」でないと前置きしながら「女権の拡張」と男女平等の概念を強く否定し、家事と子育て、夫の世話に尽くすという「自然」な役割（「天職」）を女性の任務として提示している。主人公は教育学や児童心理学、児童法などの勉強も妻に勧めるが、女性の勉強は学問ではなく、必ず良妻賢母の任務を果たすためでないといけなかった。

良妻賢母の思想は最終的に日露戦争後に広まった国家主義にも関連している。『棄石』の主人公が説明するように、「自我さへ殺し得るやうに訓練せられた女」は理想的な妻となる⁶⁵。それは、「個性を或る度まで抑制するのは、団体を形作る各員の当然の義務」であるためだ⁶⁶。夫婦も団体なので、各員に犠牲を強いる。しかし、団体は必ず権力者も必要とし、その権力者が「夫を措いて外に無いではないか」と主人公が言う⁶⁷。また、日本は「家族本位で成立つて居る社会」であるゆえに、「どうしても夫唱婦随で行かねばならぬ」⁶⁸。『棄石』は男性の優越という前提を議論の対象にしない（「夫を措いて外に無いではないか」）が、個人主義を国家主義で置き換え、家族を国家の本位とし、家族における男女の異なった役割を解明することで、日露戦争後に地方青年の統制と地方社会の秩序の強化を目的とした政策の思想的な基盤を明確に提示した。

5. 児童中心主義と国家主義との関係

以上、単行本の教育小説のパターンを確認したうえで、小説と日露戦争後の教育政策との関係を明らかにしたが、『理想の小学教師』が熱烈な国家主義を唱道すると同時に、教授法の面においては師範学校の階層制度や小学校の画一主義を厳しく批判し、代わりに児童中心主義を説いたことも注目すべきである。集団を重視する国家主義と個人を重視する児童中心主義はある程度矛盾を孕むはずだが、国家主義的な思想と児童中心主義的な教授法の組み合わせは当時の教育家にとってあながち無理なことではなかった。児童中心主義（明治前半のいわゆる「開発主義」）の研究と教授は明治中期まで隆盛を極めたが、日露戦争後に国家主義が強化される中でも児童中心主義が姿を消さなかった。『理想の小学教師』はあからさまな国家主義を唱道すると同時に、とりわけこの作品の前半において、児童中心主義も熱心に説くことで、国家主義と児童中心主義を両立させ続けた。その具体的なありようや意味について、以下で考察を加える。

児童中心主義、すなわち各児童の個性を尊重し、具体的な経験を通して自然かつ自発的な発達を目指す、コメニウスやモンテスキュー、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルなどの伝統に立脚した教育思想は『理想の小学教師』が極めて力強く唱えるものである。小説の冒頭を飾る絵はペスタロッチが妻とともに貧困の児童に英語を教えるという牧歌的な場面を描いたものであるが、楽しんで教育に全力を尽くすペスタロッチの精神ばかりでなく、その思想も具体的に解明されている。たとえば、尋常小学校では「児童の行くがままに任せ」⁶⁹、すなわちなるべく干渉を加えず、復習や予習の課題も出さないが、高等小学校からは「日常の行為につきて干渉を加へ、

予習復習の如きは日課を定めてかたくこれを守」⁷⁰らせるべきであるという考えは、児童の発達段階に応じた教育の理念を反映する。主人公は尋常小学校の間に学校や親から圧力をかけられずに「平凡の児童」として気楽に過ごせたおかげで、順調に発育し、後に理想的な教員となりえたとされる⁷¹。韻文や算数の教え方についての具体的な情報も提供される。簡単なものから始め複雑なものへ進むという順序の重要性や、生徒に韻文を創作させる時に「題を与へて詩想を抑圧し制限する」のではなく、自由に書かせるという大正期の綴り方教育に類似した教授法なども児童中心主義の具体例である⁷²。また、長い「講演式」の授業を排し、代わりに「問答法」という「活動」式の授業を実施している⁷³。

『理想の小学教師』はさらに師範学校の寄宿舎の階級制度を厳しく批判する。主人公は師範学校の学生の時に「小革命の旗」⁷⁴をあげ、上級生が下級生を抑圧する慣習を訴え、「自治的」で「家庭的」⁷⁵な寄宿舎制度への改善を果たす。

また、人生の目的は「自己の実現」だと主人公は説く⁷⁶。したがって、教師にとって最も重要なのは信仰と人格、すなわち自分の存在を認め、自己を尊敬することと、そうした自尊心を児童に教えることである。

もしこの信仰とこの人格とがないならば自身は国家政事家の職工となり機械となり、加之第二の機械や職工を作るに過ぎますまいと思ひます。故に我々は絶えず向上の精神を修養し、かつ多少哲学的思索をなして人生観を高め、以て自己の天職の尊重すべきを知り、須く信仰の基礎を絶対無限の力に求め之れに抛りて以て世に処し事に従ふべきであります⁷⁷。

信仰と人格が重要である理由の一つは、教師と生徒が国家の「職工」と「機械」になつてはいけないからである。教員が国家の担い手となることはまさに文部省の希望そのものであったと言えるが、主人公は信仰と人格をもって自立した個人の養成を主張することで、そうした教育政策に異論を唱えているように見える。この異論は以下で説明するように、実のところ国家体制に対する根本的な批判ではないと指摘しておくが、個人主義的教育思想と社会観を明確に表現する箇所が見られることは注目に値する。

最後に、主人公が小学校教師として弱者に目を向けることも指摘しなければならない。初等教育は児童全体を対象とするため、「劣等生」をクラスの中で「放任し排斥」しがちだが、主人公の小学校では「劣等生」が他の生徒と区別され、主人公がその「劣等生」を指導する⁷⁸。主人公は各生徒の身体的かつ精神的な状況を調べ、家庭訪問もし、各生徒に対して適切な対策を工夫する。彼は「児童を叱責することなく、ま

た懲罰を加ふることなきに」、児童の善行を賞賛したり、他の教師と学友によって捨てられた児童の教育に愛を込めて尽くすことで、「瓦石」を「金玉」に変える⁷⁹。『理想の小学教師』の後書きを書いた巨熊居士（詳細不明）は小説の本文のほぼ各ページの上に評も加えたが、その評は弱者を配慮する重要性を次のように確認する。「今の国民誰かよく是に意を留むるものぞ、帝国主義と競争主義独り国民と人類との間に跋扈するに非ずや」⁸⁰。弱者への特別な注目を、当時の社会において跋扈する「帝国主義と競争主義」と異なる態度として絶賛する。『理想の小学教師』は児童中心主義的な教授法を具体的に提示し、児童の発達段階や個性、自己現実を教育の中心に置き、さらに弱者の教育に専念することで、国家主義や帝国主義、競争主義の理念とは異なったように見える教育思想を唱えた。

しかし、こうした児童中心主義は実のところ、根本的な教育批判ではなく、公的な教育政策と円滑に両立した教育思想である。個人と団体もしくは個人と支配体制が衝突する時もあるが、その際に、対応しなければならないのは常に個人である。たとえば、主人公は「小革命」を起こし師範学校の寄宿舎制度を改良するが、学生たちが悪い教師を追い払うために運動を起こそうとした場合には、主人公は反対の意志を表明する。「たとひ教師にいかほどの欠点があろうとも、生徒たるものがこれを非議するのは道でなからう」と述べる⁸¹。明治後期には中学校や師範学校において学校騒動が多発し、新聞や雑誌でたびたび論争となったが、『理想の小学教師』は教育者と被教育者との権力関係を何よりも重視し、本格的な「革命」の正当性を認めずに、学校騒動や社会的な混乱を真っ向から批判している⁸²。同様に、自己実現は教育の目的として唱えられるが、「児童の個性と父兄の希望と相容れざる時」は、主人公は「非常なる苦心を以て個性の改造」を試みる⁸³。具体的には、文学の道を進みたかった児童が、父親の希望に応じて、軍隊に入ることになる。主人公は家と個人が衝突すると、家を優先する。さらに、教育の内容も個性の発達を図ることだけではなく、「忠孝仁義」という価値観からなる。主人公が実行する児童中心主義的教授法は「忠孝仁義」という価値観を、実例を通して分かりやすく面白く提示することで、品性陶冶を効果的に行う手段として機能する⁸⁴。また、すでに指摘した通り、軍隊生活が批判されると、主人公は国家のために個人の犠牲を求める。最後に、信仰と人格の重要性や自己の天職の尊重という理念は力強く唱えられるが、主人公の信仰はキリスト教でもなければ、仏教でもなく、樂觀主義でも、厭世主義でもなく、「たゞ自己の実現のみ」というのである⁸⁵。彼の天職もそもそも地方教員である。つまり、信仰と人格、自己の実現が日露戦争後の教育政策とびったりと対応するという前提があるゆえに、児童中心主義的な教育思想を唱道することが可能となっているのである。

『理想の小学教師』の分析から分かるのは、日露戦争後に国家主義が強化されたにもかかわらず、児童中心主義の教育理念が積極的に説き続けられていたということである。各個人の信仰と人格、自己の実現を重んじるという教育思想には、明らかに個人主義及び自由主義の特徴が含まれているが、そうした思想が政府の教育政策の枠組み内で唱道されることも注意すべきである。一方で、個人主義的で自由主義的な側面を持つ児童中心主義の教育思想が力強く唱えられたことは逆に、日露戦争後に定着した国家と天皇にまつわるイデオロギーが、まだ1930年代と1940年代の超国家主義にまでは発展されていなかったということも表している。『理想の小学教師』は主人公が教える学校を卒業した「三天才」を紹介するが、その模範的な卒業生は郷里内で農民や教師、実業家として働く人物ではなく、政治家と研究者と詩人、すなわち立身出世を遂げた人々である。これらの偉人は小学校教師が生んだ成果であるため、地方共同体の誇りになり、地方教育の意義も再確認できることになるかと解釈できるかもしれない。しかし、特に注目に値するのは、その政治家が「外、国家の膨張を論じ、内、社会の改善を説く」ことである⁸⁶。「国家の膨張」は満州と韓国の経営と日本帝国への統合を指すが、「社会の改善」の第一歩としては選挙権の拡張が挙げられる。選挙権の拡張は「少数資本家の反対」⁸⁷に合うかもしれないが、「国民大多数の感謝するところとな」⁸⁸るはずだとされる。政治家は「国民すべて皇室の藩屏たる観念益々堅く」⁸⁹なるという希望をもって天皇制イデオロギーの強化を唱道するが、そうしたイデオロギーは植民地における「同化」政策（「日本化」・「日本人化」政策、すなわち植民地を日本国家に統合すること）⁹⁰の根柢を成す一方で、ある種の民主主義（「立憲帝国」⁹¹）も可能にする。要するに、最も「保守的」と位置づけることができる日露戦争後の単行本の教育小説群は明治末期の国家主義にもかかわらず、その思想的な枠内において、まだある種の個人主義や自由主義、民主主義を追いかけていたと言えるのである。

6. おわりに

日露戦争後の単行本の教育小説は、近代化がもたらす矛盾とその矛盾が引き起こす社会的危機に直面し、個人主義や自由主義、立身出世、女性の地位の改良などに基づいた明治初期以来の文明開化の価値観と理想とは根本的に異なった思想を唱道した。上京と進学、社会的地位の向上ではなく、地方においての素朴な教師生活が新たな理想として提示された。地方と教職を美化するこれらの教育小説は日露戦争後に活発に展開された公式イデオロギーと教育政策を反映した。勤儉や献身、忠義、共同の精神といった徳目を身につけ、聖なる教職に身を捧げ、村全体に尽くすこと

で、共同体と国家の柱とならなければならないというのは教師たちへ向けて発せられた教訓だった。また、恋愛や自由結婚の理想は見合い結婚に置き換えられ、自らの思考力と行動力を生かし社会において精力的に活躍する、高等教育を受けた近代的な女性たちの代わりに、地方の従順な良妻賢母が理想として唱えられた。日露戦争後の単行本の教育小説は当時広く普及してきた言文一致体でなく、重みのある文語体を用いて、教師と女性、また一般の人々が果たすべき役割を権威ありげに説くことで、国民の統制と社会的な安定を目的とした。『理想の小学教師』の分析が明確にした通り、児童中心主義的な教授法や個人主義的ないし民主主義的な考えが検討し続けられたが、こうした思想は国家主義と天皇制の枠を前提としたものであった。

最後に、日露戦争後の単行本の教育小説が、当時の小学校教員たち自身の思想的傾向を代表したかどうかという問題も提示できる。本論で議論した教育小説は教育雑誌で宣伝され、教員の間で広く読まれていたため、教員に少なからぬ影響をもたらしたことは容易に想像できる。雑誌『教育界』のある投稿者は、『理想の小学教師』が「新参教師の、僕には、少なからぬ、愉快と、希望とを持たせて呉れた」と述べ、この作品を高く評価した⁹²。「理論よりも実際を貴ぶ」もう一人の教員は『棄石』を読み、「直ちにこれが実行者となりたいものである」という感想を同じ雑誌に載せ、この作品が狙った効果そのものを示していると言える⁹³。しかし、教育雑誌の投稿欄を検討すると、『棄石』と『理想の小学教師』の文学的かつ思想的な価値を強く批判した教師たちの声も聞くことができる。『教育界』のある読者は『棄石』を「著者の理想はあまりにかたよりの感じた」と批判した⁹⁴。また雑誌『教育実験界』では、竹腰親司という小学校教員が長文によって『棄石』を酷評した。東京高等師範学校教授によって執筆された、地方教育を天職と見なして献身する理想的な教員像を唱道するこの『棄石』こそは、教員に「何等の慰撫激励」も与えない「単調」な小説であるだけでなく、「名と富と愛」という人生の「真義」を否定し、貧しい教員生活の実態も無視するため、実際に「云ふ可からざる」と雖も「猛然として抑止すべからざる」というほど強い「不快の感想」を投稿者のうちに起こさせた⁹⁵。資料が限られているため、受容の様態を掘り下げることは難しいが、単行本の教育小説の内容が教師たちによって素直に受容された場合もあれば、批判や抵抗感を引き起こした場合もあったという事実は明らかであり、日露戦争後の公式イデオロギーが小学校教員に与えた影響を相対化して捉える必要があることを痛感させる。

教育雑誌は、特権的な執筆者一人の見識を伝える単行本とは異なり、数多くの記者や投稿者が作り上げ、多様な教師の立場をある程度許容していたことで、逆に教

育界の複雑で多面的なありようをうかがわせる。読者による感想文だけではなく、創作作品も多く誌面を飾っていた。たとえば雑誌『教育学术界』と『教育実験界』は日露戦争後にも、教育制度や教育思想、教員生活などを現実的かつ批判的に描く短編小説も掲載したことで、日露戦争前に教育と社会について多角的に報道した教育ジャーナリズムの役割をある程度演じ続けたと言える。とりわけ『教育実験界』の掲載文学の中では、教育美談が投稿小説の過半数を占めたとは言え、立志小説（青木湖東「小学教師の妻」1907年9月25日、内尾霊楠「女教師」1908年8月25日、細越夏村「花吹雪」1910年7月5日）、恋愛小説（木村俊「明星」1907年11月10日、同「政子」1907年5月25日、藪白明「疑惑」1907年1月25日）、教員生活や児童のありようを現実的かつ多面的に描いた小説（三浦圭三「南無参考書大明神」1908年8月25日、赤保木紅扇子「雨」1909年11月20日、みち子「蝨斯」1912年8月5日）、女性教員に対する差別を非難する小説（渡邊花水「女教師」1908年1月10日・1908年2月10日、大脇信「別離」1911年10月5日、ケイ・アイ生「仇波」1912年6月5日）、近代教育と近代社会の暗い側面にも注目し批判的な眼差しを提示した自然主義小説（三浦春愁歌「落日」1909年6月10日・1909年6月20日、同「流離」1910年6月20日、白鳥銀河「夕時雨」1910年7月20日）なども数多く現れ、その多くが読者たち・教員たち自身によって執筆されていた⁹⁶。日露戦争後の単行本の教育小説はこのように見ると、この時期に普及していた新たな国家主義と教育方針、ジェンダー観の特質を具体的に示しながら、単行本とは明確に異なった媒体である教育雑誌の多面的な性質と、「冬の時代」においても多様な読者層を形成した教員たちの姿にも間接的に光を当てるのである。

注

- 1 ヴァン・ロメル, ピーテル「明治後半における教育と文学——「田舎教師」の時代」『文学研究論集』34号(2016年2月)、19-34頁。
- 2 ヴァン・ロメル, ピーテル「雑誌『教育界』に掲載された小説群——地方教員を読者層とする新たな近代小説」『社会文学』49号(2019年3月)、133-146頁。
- 3 和田敦彦『メディアの中の読者——読書論の現在』(ひつじ書房、2002年)、112-125頁。出木良輔「〈田舎教師〉の欲望をささげる——明治四〇年代、教育界のなかの文学」『日本文学』65巻9号(2016年9月)、22-33頁。
- 4 明治後期の社会問題と当時の言説については、Carol Gluck, *Japan's Modern Myths: Ideology in the Late Meiji Period* (Princeton: Princeton University Press, 1985), pp. 174-178 を参照のこと。

- 5 Gluck, p. 31.
- 6 Ann Waswo, “The Transformation of Rural Society, 1900-1950,” in *The Cambridge History of Japan* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993), p. 543.
- 7 Gluck, *Japan's Modern Myths*, 32-33 頁。
- 8 平岡敏夫『日露戦後文学の研究 上』有精堂出版、1985年、32-39頁。Jay Rubin, *Injurious to Public Morals: Writers and the Meiji State* (Seattle: University of Washington Press, 1984), pp. 55-59.
- 9 文部省『学制百年史 資料編』(帝国地方行政学会、1972年)、36頁。
- 10 文部省、8頁。
- 11 唐沢富太郎『教科書の歴史——教科書と日本人の形成』増補(創文社、1968年)、286頁。Wilbur M. Fridell, “Government Ethics Textbooks in Late Meiji Japan,” *The Journal of Asian Studies*, Vol 29, No. 4 (Aug. 1970), pp. 823-833.
- 12 石戸谷哲夫『日本教員史研究』(講談社、1967年)、356-370頁。
- 13 倉内史郎『明治末期社会教育観の研究——通俗教育調査委員会成立期』(野間教育研究所、1961年)、22-23頁。
- 14 和田『メディアの中の読者』、117頁。
- 15 蓮実珂川『教育小説 村夫子』(育成会、1908年)、3頁。
- 16 石川栄司『理想の小学教師』(育成会、1906年)、145頁。「兵役忌避」は師範学校を卒業した小学校教員を対象とした六週間現役兵制度を指す。師範卒の教員のみにも与えられたこの特権は1889・明治22年の徴兵令の改正によって成立した。安藤忠「国民教育と軍隊——小学校教員の六週間現役兵制度」『教育学雑誌』13号(1979年3月)、11-20頁を参照のこと。
- 17 小泉又一『教育小説 棄石』(同文館、1907年)、46頁。牧歌的な場面の描写は192-207頁。
- 18 同上、46頁。
- 19 同上、129頁。
- 20 石川『理想の小学教師』、72頁。
- 21 小泉『棄石』、177頁。
- 22 蓮実珂川『教育小説 村夫子』(育成会、1908年)、208-209頁。
- 23 石川『理想の小学教師』、40頁。傍点原著者。
- 24 服部撫松『教育小説 稚児桜』(成美堂、1887年)、山麓居士『教育小説 忍耐の花』(共隆社、1889年)、坪内逍遙(すゞの舎主人)『教育小説 松かざり』(清水馬三郎、1895年)はその例として挙げることができる。明治中期の教育小説の詳細については、本論の執筆者の博士論文「明治後期における日本文学と教育との関係——「田舎教師」の時代」(筑波大学、2020年)の第5章を参照のこと。

- 25 小泉『棄石』、271-272 頁。
- 26 同上、273 頁。
- 27 同上、273 頁。
- 28 天野『教師の妻』、40 頁。石川『理想の小学教師』、序文、頁番号なし。小泉『棄石』、19 頁。「国民教育」は日露戦争前にも一般的に使われていた用語であるが、教育と国家との関係をよく示している。
- 29 石川『理想の小学教師』、73 頁。
- 30 同上、74 頁。
- 31 小泉『棄石』、19 頁。
- 32 同上、19 頁。
- 33 石川『理想の小学教師』、74 頁。
- 34 同上、48 頁。傍点原著者。
- 35 同上、77 頁。傍点原著者。
- 36 小泉『棄石』、149-151 頁。
- 37 同上、84 頁。
- 38 同上、274 頁。
- 39 同上、275 頁。
- 40 地方改良運動会の詳細については、次の研究を参照のこと。遠藤俊六「『模範村』の成立と構造——明治後期民衆統合政策研究の一視点」『日本史研究』185 号（1978 年 1 月）、37-60 頁。江守五夫『日本村落社会の構造』（弘文堂、1976 年）、第 2 編の第 2 章と補章。宮地正人『日露戦後政治史の研究——帝国主義形成期の都市と農村』（東京大学出版会、1973 年）、第 1 章。Kenneth B. Pyle, “The Technology of Japanese Nationalism: The Local Improvement Movement, 1900-1918,” *Journal of Asian Studies*, Vol. 33, No. 1 (November 1973), pp. 51-65.
- 41 蓮実『村夫子』、210 頁。
- 42 同上、211 頁。
- 43 同上、211 頁。
- 44 石川『理想の小学教師』、128 頁。
- 45 同上、124 頁。
- 46 同上、100 頁。
- 47 同上、100 頁。
- 48 同上、127 頁。
- 49 文部省『学制百年史 資料編』、487 頁から計算した。
- 50 同上、492-493 頁から計算した。

- 51 樋口勘次郎「女子教育論」『教育学術界』11巻4号（1905年7月）、38頁。
- 52 蓮実『村夫子』、63頁。
- 53 同上、20頁。
- 54 同上、33頁。
- 55 明治期の婚姻慣行については、阪井裕一郎「明治期「媒酌結婚」の制度化過程」『ソシオロジ』54巻2号（2009年）、89-105頁を参照のこと。
- 56 蓮実『村夫子』、146頁。
- 57 石川『理想の小学教師』、69頁。
- 58 小泉『棄石』、239頁。
- 59 同上、272-273頁。
- 60 石川『理想の小学教師』、69頁。
- 61 同上、71頁。
- 62 小泉『棄石』、72頁。
- 63 石川『理想の小学教師』、69頁。
- 64 同上、69-70頁。傍点原著者。
- 65 小泉『棄石』、256頁。
- 66 同上、257頁。
- 67 同上、259頁。
- 68 同上、256頁。
- 69 石川『理想の小学教師』、3頁。
- 70 同上、4頁。
- 71 同上、4頁。
- 72 同上、60頁。
- 73 同上、108頁。
- 74 同上、12頁。
- 75 同上、22頁。
- 76 同上、27頁。
- 77 同上、36頁。
- 78 同上、106頁。
- 79 同上、108-109頁。
- 80 同上、105-106頁。
- 81 同上、24頁。
- 82 学校騒動は夏目漱石の『坊っちゃん』（1906年）の背景ともなっている。小埜裕二「『坊っちゃん』小考——明治三十八年の学校騒動」『稿本近代文学』9号（1986年11月）、

1-11 頁を参照のこと。また、中学生向けに出版された短編集『教育小説 青葉若葉』（春陽堂、1903 年）に収録された短編「ストライキ」は、『理想の小学教師』と同様な立場から、ストライキを起こす学生を批判的に位置づける。学校騒動の詳細は、寺崎昌男「明治学校史の一断面——学校紛擾をめぐって」『日本の教育史学』14 巻（1971 年 10 月）、24-43 頁を参照のこと。

- 83 石川『理想の小学教師』、78 頁。傍点原著者。
- 84 同上、74 頁。
- 85 同上、27 頁。傍点原著者。
- 86 同上、132-133 頁。
- 87 同上、133 頁。
- 88 同上、134 頁。
- 89 同上、134 頁。
- 90 石田雄「「同化」政策と創られた観念としての「日本」(上)」『思想』892 号（1998 年 10 月）、47-75 頁。石田雄「「同化」政策と創られた観念としての「日本」(下)」『思想』893 号（1998 年 11 月）、141-174 頁。また、植民地に対するこの考えは、野口援太郎の教育思想の一部でもあった。磯田一雄「植民地教育と新教育——「満洲」・「朝鮮」における国史と地理の統合と作業教育化を中心に」『成城文芸』137 号（1991 年 12 月）、35-53 頁。
- 91 石川『理想の小学教師』、134 頁。
- 92 よし子「其の二十一」『教育界』7 巻 4 号（1908 年 2 月）、68 頁。
- 93 愛水生「其の十六」『教育界』7 巻 4 号（1908 年 2 月）、66 頁。
- 94 三宅美山「其の十五」『教育界』7 巻 4 号（1908 年 2 月）、66 頁。
- 95 竹腰親司「教育小説棄石を読む」『教育実験界』21 巻 5 号（1908 年 3 月 1 日）、67 頁。
- 96 雑誌『教育実験界』とその掲載小説の詳しい分析と位置づけについては、本論の執筆者の博士論文「明治後期における日本文学と教育との関係——「田舎教師」の時代」（筑波大学、2020 年）、第 8 章を参照のこと。雑誌『教育学術界』とその掲載小説については、同書の第 7 章を参照のこと。